に腰を下し、脚を延して足首と膝との間に立て、又室内机上に立てゝ畫筆を取る。されど空間に高く上ぐるを得ない事が不便であるが、僕等の樣な初學者には豈輕便と云はざるを得んやだ。

□こゝ迄云へばあとは……

陸中　千葉悅彌

夏休に歸省するとき、大枚九錢奮發して、畫用紙一枚求め、半日を棒にふつて、畫盤を作りブリッキ製の繪具箱も用意して、水彩畫の栞を固く握りつめて、歸つたのは、九月。某の日曜日、用意萬端をとゝのへて、寫生なすべく、獨り山路を辿つた、山深く分け入ると、葡萄の薄紅い葉が垂れてゐたり、活々した松山があつたが、到底私には不可能なことは知れきつてゐるから、度々、睨め乍ら谷間にと下つた、ところか、水車小屋があつた、――こゝまで云へば後はお了解になるでしやう、空腹を抱えて昇り路の困難をこぼしながら歸つたが、家に着くと忽ち元氣回復。

□滑稽な反抗心　　遠江　土　筆

『山は遠き程高く描いて路は常に横キザを入れてある。由來日本畫の見るに堪えぬのは斯くの如く實景を寫さゞるが爲である』。と誰やらが何かに書いてあるのを見た時僅かに四君子や佛掌薯山水を學ひたる予は高きに登つて俯瞰すれば或程度迄は遠き山がたかく見える、日本畫は俯瞰的に其圖を取つたものである、而して其然る所以のものは日本の建築や裝飾か多く竪長きものを要したからである。又山路は濘るとを防ぐが爲に實際横に刻みてある。若し土が軟かでそれが出來ない處は往々丸本を横へて足溜を作つてある。平地の路と雖車轍の通ずるのは近來の事である、況んや日本人は横齒の足駄を穿つてはないか、是等は決して實際に反したものでない。而かも日本畫の長所は此に在らずして彼に在り。など

一時は頗る滑稽なる反抗的意見が胸中に湧出した、しかし此時から予が好尙は一變した、そして終に筆を水彩繪具に染むることとなつたのである。

是が丁度六年前の事である、されど悲哉如何に余暇でのことは云へ、未だ人に見せらるゝ程の繪は出來ない。

『みづゑ。の體裁は高尙優美此點は雜誌中の王と云ふて差支ひは無、紙質も良好石版も成効、只だ紙數の少にして記事の狹きを遺憾とす紙數の增加を願ふは僕一人で無かろーと信ず』

『大下先生の肖像及び傳記を出して下さい』

『みづゑの口繪はより大なる物を出して下さい』

『僕と水彩繪葉書交換をする人はありません か但し僕の拙筆なるを御承知の上（宇都宮孤雁生）

○

繪ハガキ自筆交換を願ひます、必ず返信します（千葉縣匝瑳郡八日市場原砂原佐藤むつ子）

○

四方の讀者さまに水影畫の交換を願ひ御示敎に預りたく妾も必ず御返申すべければ（福井市老松上町六十八、佐田友雄方樋口絹子）

＊　＊　＊　＊　＊